

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：30105

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20030

研究課題名（和文）形態論的アプローチによるロゴファー的代名詞の性質解明

研究課題名（英文）A morphological approach to the nature of logophor-like reflexive pronouns

研究代表者

井川 詩織（Ikawa, Shiori）

藤女子大学・文学部・講師

研究者番号：10962889

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：一部の再帰代名詞は、ある一定の解釈のもとで別な節から先行詞を選択することができる（長距離束縛を許す）と言われている。本研究の目的は、特に長距離束縛が起きるメカニズムの分析についての近年の発展を念頭におき、ある再帰代名詞が長距離束縛を許すかどうかどのように決まっているのかを明らかにすることであった。研究期間全体を通して、主に日本語の再帰代名詞「自分」「自分自身」「彼/彼女自身」の分析を行い、更にその分析を他言語における再帰代名詞のふるまいに適用できるか調査を行った。以上の分析をもとに、特定の内部構造をもった再帰代名詞のみが、上記のようなふるまいを見せると主張するに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

長距離束縛は、1980年代から継続して議論されてきた現象であり、特に意識主体性という意味的な性質から近年改めて注目されている現象でもある。本研究は、長距離束縛のメカニズムの分析の発展を踏まえて、改めて長距離束縛を許す再帰代名詞と許さない再帰代名詞の性質の違いを問いただしている。これにより、(i)経験的には、日本語のふるまいについても言語類型論的な観点からも、より精緻で正確な予測を行うことができるようになり、(ii)理論的には(a)近年の長距離束縛の分析にさらなる証拠を与えつつ、(b)フェーズ理論や束縛条件といった統語理論の中核をなす要素についても知見を与えた。

研究成果の概要（英文）：It is well-known that a limited set of reflexive pronouns allow long-distance binding (i.e., finding an antecedent in a different clause). The purpose of this project was to reveal exactly what kind of reflexive pronouns belong to this set, especially given the recent development of the analysis of the mechanism of long-distance binding. I started from the analysis of Japanese reflexive anaphors “zibun”, “zibun-zisin” and “kare/kanozoyo-zisin” and then extended the result to the observations regarding reflexive pronouns in other languages. This led me to claim that reflexive pronouns with a certain internal structure allow long-distance binding.

研究分野：言語理論、統語論、形態論

キーワード：統語論 形態論 束縛条件 長距離束縛 再帰代名詞

1. 研究開始当初の背景

再帰代名詞を含む照応形や代名詞の分布についての一般化である束縛条件は、統語研究において広く受け入れられている。一方で、多くの言語において観察されている長距離束縛と呼ばれる現象においては、再帰代名詞が他の節から先行詞をとっており、これは「照応形は同一節内に先行詞をとらなければならない」という束縛条件 A に反しているように見える。このため長距離束縛は、1980年代から継続して議論されてきた現象であり、また、近年は意識主体性という意味的な性質から改めて注目されている現象でもある。その中で、本研究課題が扱う「どのような再帰代名詞が長距離束縛を許すのか」という問題についても、主に1980年代から1990年代にかけて議論されていた。しかし当時の議論は長距離束縛のメカニズムの分析における近年の発展とは相容れないものであり、翻って、近年の長距離束縛研究の発展は、どのような再帰代名詞が長距離束縛を許すのかについて明確な答えを与えられていない状況であった。そこで、(i) 近年の長距離束縛研究が捉えようとしてきた意識主体性に関する観察を説明しつつ、(ii) どのような再帰代名詞が長距離束縛を許すのかを明らかにできるような分析の構築が必要であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近年の研究において提案されている長距離束縛のメカニズムを念頭に、どのような再帰代名詞が長距離束縛を許すのかを明らかにすることであった。具体的には、(i) 日本語においてなぜ特定の再帰代名詞のみが長距離束縛を許すのか、また、(ii) 他言語においてどの再帰代名詞が長距離束縛を許すかについて、日本語と同様の分析が可能なのかを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は大きく3段階に分けて行った。まず第一段階では、前提となる長距離束縛のメカニズムの分析について、日本語とアフリカの言語 (Ibibio) を比較検討することで、分析の精緻化を行った。第二段階では、日本語の再帰代名詞の分析を行った。具体的には、長距離束縛を許すとされている「自分」や「自身」と比べ、長距離束縛を許さないとされている「自分自身」「彼/彼女自身」がどのような性質を持っているかを調査し、第一段階で得られたメカニズムを前提として、その性質がどのようにして長距離束縛の可否に結びついているのかを分析した。第三段階では、日本語の分析から得られた結果が、どのように他言語に拡張できるのかを分析した。

4. 研究成果

研究期間を通して、大きく分けて(1)長距離束縛のメカニズム分析の精緻化と(2)日本語や他言語においてどのような再帰代名詞が長距離束縛を許すかの解明、という2点について成果が得られた。前者は主に「研究の方法」の節で述べた第一段階の成果に、後者は第二段階・第三段階の成果に、それぞれ対応するものである。

(1) 長距離束縛のメカニズム分析の精緻化

長距離束縛のメカニズムについては、特に Charnavel (2020a, b) がなぜ特定の意味的条件 (意識主体性) を満たした場合のみ再帰代名詞の長距離束縛が許されるのかを明らかにした。このような研究は、前提として「再帰代名詞の長距離束縛は、意識主体性に関わるという観点において、主にアフリカの言語に見られるロゴファーと呼ばれる代名詞と類似している」という議論を念頭に置いている。しかし、実際にロゴファーのふるまいと長距離束縛を許す再帰代名詞のふるまいの厳密な比較は、先行研究においては行われていなかった。そこでまず、本研究課題の前提となっている Charnavel の分析をより精緻なものとするため、Mark Baker 氏との国際共同研究を通してアフリカの言語 (Ibibio) のロゴファーと日本語の再帰代名詞の比較を行い、その共通点と相違点を適切に捉えられる形で Charnavel の分析の改訂を行った。

この結果として、経験的な観察として、補文においてはロゴファーと日本語の再帰代名詞は同様のふるまいをするが、それ以外の環境においては両者は異なるふるまいを見せることを示した。理論的には、大筋では Charnavel の長距離束縛の分析を継承しつつ、特にコントロールと呼ばれるメカニズムが応用されていると考えることで、補文における両者の類似性、それ以外の環境における両者の違いを捉えられると提唱した。この成果は、国際論文誌において発表されている。

以上の成果はそれ自体で、長距離束縛のメカニズムに関する研究に経験的にも理論的にも貢献するものである。また、特に本研究課題の文脈では、日本語の再帰代名詞の長距離束縛を分析する上で捉えなければならないふるまいと、特にどの理論的前提が肝要であるかを整理することにつながった。

さらに以上の研究から派生して、日本語の再帰代名詞が長距離束縛を受けない場合のふるまいに関する研究（国内共同研究として国際学会にて発表）や、補文以外での日本語再帰代名詞において重要になる「共感性」という意味的概念の研究（個人研究として国際学会にて発表）を行った。

（２）どのような再帰代名詞が長距離束縛を許すかの説明

上記の（１）で得られた成果を前提として、本研究課題の中核的な問である「どのような再帰代名詞が長距離束縛を許すか」という問に移行した。上述の通り、この問は1980年代から1990年代にかけてPica (1987)、Katada (1991)、Cole et al. (1990)、Reinhart & Reuland (1993)、などにより既に議論がなされていた問であったが、そこで行われた議論は、（１）で見たようなCharnavelの分析やそれを精緻化したものとは相容れない議論である。また、当時の議論において前提とされていた「単一の形態素からなる再帰代名詞は長距離束縛を許し、複数の形態素からなる再帰代名詞は許さない」という一般化は、それ以降の複数言語にまたがる研究において反例が多く見つかったため、その信憑性が問われている状態であった。そこで、まずはデータを日本語に絞り、日本語のデータを余さず説明できるような一般化を提唱し、それに理論的な説明を与えた。次にその理論的な説明が他言語について何を予測するかを明らかにした。

まず日本語にデータを限れば、先行研究が前提としていた通り、形態的な複雑性と長距離束縛の可否がある程度連動することを確かめた。ただし、これは絶対的な連動ではなく、再帰代名詞が文のどこに出てきているかによって、例えば複数の形態素からなる再帰代名詞であっても長距離束縛を許すという観察が得られた。この観察を踏まえて、日本語においては複数の形態素からなる再帰代名詞の内部にはフェーズ境界が存在し、このフェーズ境界が原因で、再帰代名詞が文の特定の位置に生じた場合にのみ、（１）で見たような長距離束縛のメカニズムがPhase Impenetrability Condition (Chomsky, 2001)と呼ばれる条件に抵触すると提案した。

日本語に関する以上の分析は、他言語において「形態的な複雑性と長距離束縛の可否の連動は絶対的ではない。ただし、長距離束縛を許す代名詞と許さない代名詞があった場合、長距離束縛を許さない代名詞は少なくとも長距離束縛を許す代名詞と同程度には形態的に複雑である」と予測する。これは1990年代以降観察されてきた「複雑性と長距離束縛の可否の連動」に対する反例を踏まえてHaspelmath(2008)が提唱した新たな一般化と合致するものであり、上記の分析が言語類型論の観点から正しい予測をしていることを示している。さらに、これまでは形態的な複雑性という観点のみで通言語的な一般化が議論されてきたが、本研究は「形態的に複雑な代名詞について、どのような構造を持っている場合に長距離束縛が許されるか」といったより詳細な予測を行う点で、今後の他言語における研究の発展を促進するものである。この成果は、特に日本語に関する観察と分析が国際学会にて発表され、プロシーディングス論文としてまとめられている。また、日本語や他言語についてのより詳細な分析結果が、現時点で国際論文誌に条件付きで採択されている。

参考文献

- Charnavel, Isabelle. 2020a. *Locality and logophoricity: A theory of exempt anaphora*. Oxford University Press.
- Charnavel, Isabelle. 2020b. Logophoricity and locality: A view from French anaphors. *Linguistic Inquiry* 51(4). 671-723.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In Hale, Kenneth Locke (ed.), *Ken Hale: A life in language*, 1-52. MIT Press.
- Cole, Peter & Hermon, Gabriella & Sung, Li-May. 1990. Principles and parameters of long-distance reflexives. *Linguistic Inquiry* 21(1). 1-22.
- Haspelmath, Martin. 2008. A frequentist explanation of some universals of reflexive marking. *Linguistic Discovery* 6(1). 40-63.
- Katada, Fusa. 1991. The LF representation of anaphors. *Linguistic Inquiry* 22(2). 287-313.
- Pica, Pierre. 1987. On the nature of the reflexivization cycle. *Proceedings of NELS* 17(2). 483-500.
- Reinhart, Tanya & Reuland, Eric. 1993. Reflexivity. *Linguistic Inquiry* 24(4). 657-720.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Mark C. Baker & Shiori Ikawa	4. 巻 -
2. 論文標題 Control theory and the relationship between logophoric pronouns and logophoric uses of anaphors	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Natural Language and Linguistic Theory	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s11049-023-09592-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Shiori Ikawa	4. 巻 2
2. 論文標題 Simplex and complex anaphors revisited	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Proceedings of the Fifty-Third Annual Meeting of the North East Linguistic Society	6. 最初と最後の頁 85-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masako Maeda, Shiori Ikawa, Akitaka Yamada & Yoichi Miyamoto	4. 巻 -
2. 論文標題 Copular Short Answers and Speech-Act Phrase in Japanese	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Proceedings of SICOOG 25	6. 最初と最後の頁 86-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Masako Maeda, Shiori Ikawa, Akitaka Yamada & Yoichi Miyamoto
2. 発表標題 Copular Short Answers and Speech-Act Phrase in Japanese
3. 学会等名 SICOOG 25（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shiori Ikawa
2. 発表標題 Empathy and Nominal Licensing in Japanese
3. 学会等名 Chicago Linguistic Society 60 (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Shiori Ikawa
2. 発表標題 Simplex and Complex Anaphors Revisited
3. 学会等名 North East Linguistic Society 53 (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	Rutgers University		